

(5) 別荘文化に由来する歴史的風致

明治時代から大正時代にかけて、避暑・避寒・保養の適地として知られるようになった鎌倉では、この地に別荘を構えた貴顕紳士の中で生まれた価値観が広がり始め、知識、道徳、習慣、作法、生業、芸術といった人々の精神や営みに大きな影響を与えるようになった。

別荘地化に端を発し、地域固有の自然的・歴史的背景や人的・物的交流を通じて洗練されたこれらの文化は、鎌倉のまちの発展に大きく寄与した「別荘文化」といわれており、現代の鎌倉に住まう人々の趣向やライフスタイルにも、その諸相を見ることができる。

ア 別荘地としての鎌倉

明治9年(1876年)、東京医学校に招かれたドイツのエルウィン・ベルツ博士は、予防医学の観点から「保養の思想」を普及させた医師であり、早くから海浜保養地(別荘地)としての湘南の地域特性を認めた一人であった。

ベルツは明治13年(1880年)の日記に、健康管理を依頼されていた知人の子どもたちを片瀬へ海水浴に行かせたことや、七里ヶ浜の海岸が自分にとっては日本で一番美しい地点であると感じていることなどを書き残している。

また、ベルツ博士が招かれた東京医学校で当時校長を務めていた医政家の長與専齋は、明治17年(1884年)に鎌倉の海を海水浴の適地として紹介するとともに自身も由比ガ浜に別荘を持ち、明治20年(1887年)には海浜のサナトリウムである「海濱院」の建設に深く携わるなど、海浜保養を推奨した。

当時の海水浴は、医療行為として「潮湯治」^{しおとうじ}とも呼ばれ、決まった時間に海に入ることを繰り返すというものであったが、明治18年(1885年)に、長谷で営業していた三橋旅館が「海水浴御馳走」なる広告を「東京横浜毎日新聞」に掲載し、明治21年(1888年)には、前年に療養所としてオープンした「海濱院」が「海濱ホテル」へ衣替えすると、商売として海水浴客を受け入れる体制が整い、医療としての海水浴は瞬く間にレジャーとして定着していった。



写真2-93 由比ヶ浜(明治時代)



写真2-94 三橋旅館



写真2-95 海濱ホテル

当時この地域は、水の便が悪く農業には不向きとされ、価値の低い土地であったが、小高く展望が良いこと、松林が陽を遮って涼風を送ってくれること、何より海水浴に便利なこと等夏向きの別荘地としては適地であり、次第に土地の価値が見直されるようになっていった。

また、明治20年(1887年)に東海道線横浜・国府津駅間が開通し、明治22年(1889年)に当時軍港のあった横須賀までの連絡路として横須賀線が開業すると、土地の利用価値が一気に高まり、明治32年(1899年)には、鎌倉駅の近傍に御用邸が造営されたこともあいまって、東京に住まう政界、財界、官僚、軍人、皇族、華族などが競って別荘を構えるようになった。現存する鎌倉文学館(旧前田家別邸)、鎌倉市長谷子ども会館、古我邸(旧荘邸)などは、その代表的な建物であり、この他にも往時を偲ばせる別荘建築が数多く残されている。

鎌倉文学館は、昭和11年(1936年)に旧加賀藩前田家第十六代当主前田利為まえだとしなりによって建てられた鎌倉の別荘を代表する建物の一つといえる。海岸線と並行に走る由比ヶ浜通りを山側に折れた高台に位置し、眼下に相模湾を一望することのできるこの建物は、佐藤栄作元首相が別荘として利用したほか、作家三島由紀夫の小説「春の雪」の一場面にも登場する。昭和58年(1983年)7月、前田家より市が譲り受け、昭和60年(1985年)10月に鎌倉文学館として開館した。

長谷子ども会館は、鎌倉文学館の南西の閑静な住宅街に佇む小さな洋館である。明治41年(1908年)に株式仲買人として財を成した福島浪蔵別邸ふくしまなみぞうとして建てられ、当時は現存の洋館部分の北側及び北東部に和風棟が建ち、広大な敷地に庭園が設けられていたと考えられている。これらの建物は、大正10年(1921年)に実業家の諸戸清六別邸せいろくとなり、関東大震災に遭っても建物は健在であったが、昭和51年(1976年)頃から建物が使用されなくなると、広大な土地はその殆どが分割され、23の宅地に姿を変えてしまった。昭和55年(1980年)に寄贈を受けた鎌倉市がここを鎌倉市長谷子ども会館とするため改修工事を始めた際には、和風棟は殆ど姿を消して



写真2-96 鎌倉文学館(旧前田家別邸)



写真2-97 長谷子ども会館



写真2-98 関東大震災の様子

おり、代りに市は洋館部北側へ鉤型に建物を増築し、洋館と一体化させて子ども会館とした。現在、創建当初の建物は2階建ての洋館とその北側の廊下部分、及び蔵のみであるが、市による改修時も旧状に復するよう注意深く工事が行われており、明治期の貴重な遺構といえる。

また、海浜部から始まった鎌倉の別荘の歴史は、鎌倉市のほぼ中心に位置する「鎌倉山」での高級分譲地の開発にもつながっていくこととなる。

当時の実業家であった菅原通済は、ドイツ人の貿易商クルト・マイスナーの着想から、眺望の良いこの丘陵を別荘地にしようと考え、その構想は、最小一区画 500 坪という高級住宅地の分譲販売へと発展していった。大正 15 年（1925 年）に我が国初の自動車専用道路である「大船江の島自動車専用道路（京急道路）」の建設が認可されると、通済は道路建設と併せて乗合自動車の運行を計画するとともに、深沢村の山林を「鎌倉山」と命名し、昭和 4 年（1929 年）から分譲を開始した。

鎌倉山には、現在も分譲当初に建てられた瀟洒な住宅や大区画の敷地が残されており、往時と変わらぬ高級住宅街の佇まいをうかがい知ることができる。

昭和 7 年（1932 年）発行の「鎌倉山住宅地株式会社分譲地略図（以下「分譲地略図」という。）」を見ると、分譲地の南西部に位置する「榑亭」は、相模湾を見下ろす敷地とその門構えから、個々の区画が広大な鎌倉山にあって今もなお人目を引く存在である。榑亭は、鎌倉山の分譲を行った菅原通済の父であり、鉄道事業家・土木技術者として知られる菅原恒覧の別荘として建てられたものである。当初は「清華園」と称しており、分譲地略図に建物の配置がひとときわ詳しく書かれていることから、いち早く具体の建築計画が固まっていたことが伺える。恒覧は、当時の戸塚（横浜市）において関東大震災で倒壊した農家を昭和 4 年（1929 年）7 月に購入して移築し、同じく震災で倒壊した鎌倉の青蓮寺の玄関の材料を買い付けてこれも移築した。恒覧が自ら記した「清香園誌」には 2,400 坪と記されている広大な敷地内に、当時造営された建物がいくつも示されている。

また、鎌倉山に所在する建物の中でもひとときわ存在感を有する「扇湖山荘」は、製薬会社「ワカモト製薬」創業者の長尾欣彌の別荘として建てられたもので、分譲地略図の東南に「長尾」の文字が見えることから、分譲当初から建設が予定されていたこ



写真2-99 榑亭



写真2-100 扇湖山荘

を取り囲む自然環境が一体となって、鎌倉山の良好な市街地環境の一端を担っている。

これらの建物に加え、分譲当初に植えられたと伝わる数百本もの桜の木がまちのいたるところに立ち並び、特に住宅街の中央を走る通称「バス通り」の沿道に並ぶ桜並木は「かまくら景観百選」に選ばれ、毎年桜の時期ともなると桜並木のトンネルを目当てに多くの人々が訪れる。

鎌倉山においては、住宅地としての開発を進めた企業により、下水道や浄化槽などのインフラや生鮮食料品店、警備小屋など居住に関する施設整備が進められ、また、「交詢閣こうじゆんかく（鎌倉山ロッジ）」と呼ばれる帝国ホテル直営の社交場が開設されるなど、高級イメージが作り出されていった。そして、この地を「理想郷」として作り上げようとする意識は、企業側だけでなく住民側にも十分理解され、鎌倉山が住宅地として開発された時から住まう人々が、昭和7年（1932年）8月に「友美会」と称する自治組織を設立し、主体的なまちづくりを進めていった。

友美会は、住民相互の親睦を図り、自治の精神に基づき、鎌倉山住宅地を理想郷にするという趣旨で設立され、新しい居住者に対しては、その住居を建てる際、自然環境との調和を図ることや他家の眺望の妨げにならないような建物の設計を行うこと、生け垣や自然石を利用し環境の美化に配慮すること等を指導していた。

昭和15年（1940年）に出された内務省訓令により友美会は町内会へと形を変え、住民の生活も戦争によって大きく変化することとなるが、肩書敬称にとらわれることなく、なお住民間の結びつきは強くなっていった。その後、大きな戦災を受けることなく自然の佇まいが残された鎌倉山においては、昭和22年（1947年）に町内会令が廃止された後も地域における自治組織は存続し、発足当初の友美会のようにまちづくりに対する意識の高さがあり、この地になじまない宅地造成の計画が持ち上がった折には、住民が一致団結し、事業者と直接折衝するため現場へと赴くこともあった。

昭和45年（1970年）、鎌倉市において初めて市街化区域と市街化調整区域の区域区分（線引き）が行われた際、市は国勢調査における人口集中地区の数値基準に従い、この地域を市街化調整区域ではなく市街化区域にすることを提案したが、当時の自治組織である「鎌倉山町内会」は、「鎌倉山住民を分断する」という理由から市街化区域化に反対する意思を表明した。その後も、線引き更新が行われる5年ごとに、その判断を住民に委ねてきたが、住民の判断は一貫して市街化調整区域のままでいることを望むというものであった。

そして、これまで鎌倉山の景観を守り引き継いできた先人の意識や活動は、現在この地域に住む人々にも受け継がれており、平成12年（2000年）には、市のまちづくり条例に基づき、鎌倉山町内会が「鎌倉山のまちづくり計画」を策定し、快適な居住環境の保全と創造を自主的に進めている。

この計画では、建築物や工作物の外観に関し、原色や刺激的な色彩は施さないこと、道路との境界に塀を設置するときは出来るだけ生け垣を選択すること、止むを得ず既存宅地を分割する際には一定の敷地面積を確保するなどの具体的な取組が掲げられており、良好なまち並み景観を維持するため、町内会が中心となって様々な活動を行っている。

鎌倉山において大規模な宅地開発事業が計画されると、開発事業者は計画概要を町内会へ連絡し、これを受けた町内会は、1区画の敷地面積を60坪から100坪程度確保するよう事業者へ要請を行うほか、開発予定地の周辺住民へ計画概要を知らせ、住民の意向が開発事業者へ伝わるよう調整を行っている。開発工事に伴い、止むを得ず桜の木を伐採する場合は、必ず失われた本数以上の桜の木を区域内に植えるよう事業者と協議し、桜の保全を図っている。

また、鎌倉山町内会が所有する「鎌倉山集会所」の建替えにあたっては、周囲の景観に馴染む集会所とするため、住民有志により検討委員会が結成され、地域にゆかりのある建築家数名から設計プランの提案を受けて住民投票で設計者を決定し、平成27年(2015年)に建替えが完了した。

この他、町内会だけではなく様々な自主グループが良好なまち並み景観を守る取組を行っている。住宅地西側のロータリー付近では、住民が定期的に道路の清掃活動を行うとともに、花壇に季節の花を植え、まちに彩りをそえている。また、鎌倉山の分譲当初に住宅地の鎮守として奉斎された「鎌倉山神社」や、「鎌倉山集会所」の敷地内などでも住民による自主的な清掃活動が行われている。

このような住民の地道な努力の結果、まちに新しく建てられる建築物も既存の大区画の住宅が醸し出すまち並みに溶け込むよう配慮がなされ、そこに新しく植えられた桜の木は、分譲当初に植えられ樹齢を重ねた木とともに花を咲かせ、良好なまち並み景観が次の世代に引き継がれている。



写真2-102 鎌倉山の桜並木

イ 別荘文化を今に伝える建築物

現在も鎌倉駅の西側一帯に地名として残る「御成町」は、この地に御用邸が存在していたことに由来する。御用邸の存在は、貴顕紳士の集まる高級別荘地として認知されていた鎌倉にとって、ステータスシンボルともいえるものであった。

現在、御用邸としては葉山、那須、須崎の三箇所が使われているが、建設当時はいずれも御用邸を中心として、その周辺に皇族、華族の別荘が立地していた。その様相は、当時の鎌倉においても同じであり、御用邸が建設された明治32年(1899年)以降、華頂博信かちょうひろのぶ

こうしゃく このえふみまろ
侯爵所有の旧華頂宮邸や近衛文麿が静養した古我邸などが建てられ、これらは往時を偲ばせる建築物として現在も市内に残っている。

その後、御用邸は関東大震災によって殆どの建築物が倒壊したため廃止となり、昭和6年（1931年）に小学校等の教育施設建設用地として鎌倉町に払い下げられた。

御用邸の跡地に現存する御成小学校旧講堂は、洋風建築と和風建築のそれぞれの特徴を取り入れ、昭和8年（1933年）に建てられた木造の建築物であり、旧講堂の近傍には、市民の寄附によって昭和11年（1936年）に建てられた旧鎌倉図書館も残されている。さらに、これらの建物に挟まれるように往時の面影を残す御成小学校校門の冠木門かぶきもんが建っており、校内の豊かな緑と相まって道行く人の心を和ませる風景を醸し出している。



写真2-103 御成小学校校門の冠木門

鎌倉が別荘地として注目されはじめた頃の別荘は、概ね夏の一時的な滞在に利用するものであり、海浜部に建てられることが多かったが、東海道線横浜・国府津駅間の開通、及び横須賀線の開業などにより交通の便が高まったことで常住化が進み、さらに関東大震災後は、海浜部を避け、山側にも常住することを目的とした洋館が建てられるようになった。

旧華頂宮邸は、文治4年（1188年）創建の浄妙寺や竹林の庭で有名な報国寺ほうこくじにほど近い、衣張山東側の静かな谷戸の奥に位置する。昭和4年（1929年）春、華頂博信侯爵邸として建てられ、当時から常住の住宅として用いられていたというが、華頂夫妻が生活したのは数年のみであった。その後、度々持ち主が変わり、昭和42年（1967年）頃実業家の松崎貞治郎氏が購入、昭和45年（1970年）頃から松崎夫婦が常住するところとなり、敷地の最南端の茶室、門及び和風平屋がこの時東京から移築された。外観は、洋風民家に設けられるハーフティンバースタイルで、敷地内の樹木、幾何学式庭園と一体となり、往時の華やかな暮らしを彷彿とさせる。



写真2-104 旧華頂宮邸

扇ガ谷にある古我邸は、鎌倉文学館、旧華頂宮邸とともに鎌倉三大洋館と呼ばれている。大正5年（1916年）、三菱合資会社の専務理事であった荘清次郎の別荘として建てられ、その後、日本土地建物はまぐちを経営していた古我貞周が昭和12年（1937年）に取得した。首相を務めた近衛文麿や浜口雄幸おさちなども別荘として利用し、現在は飲食店として活用されている。



写真2-105 古我邸(旧荘邸)

また、この近辺には、大正14年（1925年）竣工の「日本基督教団鎌倉教会附属ハリス

記念鎌倉幼稚園」や大正15年（1926年）竣工の「日本基督教団鎌倉教会会堂」、昭和8年（1933年）竣工の「鎌倉聖ミカエル教会聖堂」が残されている。これらは、鎌倉に別荘を持った人々の中に、キリスト教の信者が多くおり、鎌倉の地で礼拝を守りたいとの願いから建てられたものであるといわれている。現存する建物は、いずれも関東大震災以降の建築であるが、伝道の歴史はさらに古く明治30年（1897年）頃といわれており、別荘の人々との関わりがうかがえる。

ウ 別荘での生活を支えた商業活動

別荘地としての人気が高まる中、一時的な滞在とは別に、この地を常住の地に選び、新しく転入してくる富裕層も含めて、彼らはいっしょに「別荘族」とも呼ばれるようになった。そして、彼らの生活に密着していたのが、若宮大路の^{げば}下馬交差点から長谷寺に至る由比ガ浜通り沿いなどに展開した商店であった。明治45年（1912年）発行の「現在の鎌倉」（大橋良平著）には、「毎年七月中旬か又は八月上旬頃より、九月の下旬頃迄定則の様に、必ず此地に来て別荘或は貸別荘又は貸間に避暑する人が多い、之れ等の人を別荘客、避暑客と云ふて、鎌倉土着の諸商人^{そのた}其他貸家業者^{おおい}は大に崇拝するのだ、それも其筈^{そのはず}で鎌倉人士の財源は全く此避暑客別荘客にあるからだ、鎌倉は此夏期^{かきいれどき}を書入時としてあるので一部の業者は此期節^{きせつ}の収入が一年の諸経費に充てられるのである。」とあり、当時の商店が別荘に滞在する顧客向けの営業で潤っていたことが分かる。

ここでの商業活動では、別荘を持つ顧客への品質の高い商品の提供や「御用聞き」と呼ばれるサービスの提供など、商店の創意と工夫の積み重ねによる独自の商業体系が発展した。現在も由比ガ浜通り沿いでは、米、酒、うなぎ、蒲鉾、鎌倉彫などの老舗が高品質な商品の製造・販売を続けており、古くからの建物で営業を行っている店もある。

例えば、由比ガ浜通り沿いに店を構える「柴崎牛乳店」は、鎌倉大工である蔵並長勝によって昭和12年（1937年）に建てられたレトロなファザードが目を引く建物で現在も営業している。初代店主の柴崎梅吉は、明治23年（1890年）に横須賀からサナトリウムのある鎌倉村に移転し、当時この地で牛を飼いながら別荘で過ごす人々に牛乳を配達していたという。

鎌倉を代表する土産物であり、伝統的工芸品である鎌倉彫も、鎌倉の別荘地化と深く関わりあい、発展していったものの一つである。それまで主に寺院の仏具や茶道具を作成していた仏師たちは、廃仏毀釈などによって造像の需要が激減した後、別荘を構えた上流階級の人々の需要に合わせ、家具調度品や工芸品の製作を主体とするようになり、それが鎌倉彫として浸透、発展していった。この地に残る「寸松堂^{すんしょうどう}」、「白日堂^{はくじつどう}」は、こうした歴史を今に伝える鎌倉彫の商店兼住宅として貴重な存在といえる。

寸松堂は、昭和11年（1936年）9月1日起工、同年12月25日竣工であることが、現

存する建築届出書で確認されている。設計・施工者は西井喜一と記載されているが、喜一の子息である西井正二もまた大工であったことから、父子で建設業を営んでいたといわれている。

3階建ての塔の頂部に相輪を載せた姿は、寺院建築を思わせるが、窓は城郭建築に見られる武者窓であり、寺院建築と城郭建築が町家と合体したような建物である。由比ガ浜通りのほぼ中間地点に位置し、三方向を通りに開いた角地に建っていることから、その特徴的な外観は周辺のランドマーク的な存在となっており、由比ガ浜通りを行き交う人々が足を止めて建物に見入っている。

寸松堂は、大正10年（1921年）の創業であり、大正13年（1924年）に現在の寸松堂が建っている場所の近傍に店を構え、その後移転した。創業者の佐藤宗岳、二代目の佐藤泰岳と続き、現在は三代目がこの店を営んでいる。工房を備えた店舗兼住宅において営まれている鎌倉彫の製作・販売は、特徴的な建物と調和することによって、鎌倉彫の歴史と伝統を今に伝えている。重厚な店内に足を踏み入れると茶托や鏡類、銘々皿、盆、菓子器など様々な作品が取り揃えられており、近年は鎌倉彫の体験教室なども実施している。

また、由比ガ浜通りと交わる県道32号（藤沢鎌倉線）にも鎌倉彫の商店兼住宅である「白日堂」が建っている。江ノ電の長谷駅と鎌倉大仏が鎮座する高德院とを結び、年間を通じて多くの観光客が行き交うこの通りにおいて、白日堂は、一際目を引く存在である。設計・施工を担当したのは、寸松堂と同じ西井父子で、寸松堂をモデルに建築されたと考えられ、より民家に近い外観であるが、寺院と城郭の意匠を加えた独特の風貌が保たれている。棟札や当時の建築書類等が現存しないため、建物の沿革を辿ることは難しいが、昭和15年（1940年）の建築といわれる。

白日堂の創業は、昭和9年（1934年）にさかのぼる。創業者の伊志良不説は、寸松堂二代目の佐藤泰岳の実兄であり、泰岳は佐藤家の養子として寸松堂を継いでいる。不説は戦前、主に茶道具を製作し、戦後は若い弟子たちの育成や工房・店の経営に努め、厳しい時期を乗り越えてきた。こうした折、横須賀に進駐した将兵が鎌倉を訪れた際、鎌倉彫を購入するようになり、中にはテーブルを注文する者もいたという。現在、白日堂では、女性の店主が彫るオーダーメイドのブローチ等が人気を博している。



写真2-106 寸松堂



写真2-107 白日堂

エ 文化人の活動

別荘地としての鎌倉の発展は、明治中期から大正初期まで続き、大正元年（1912年）には町の総人口の約3分の1が転入した人々で占められ、一部の有力者が有志による地域団体を組織し、より積極的に町政へ参加するようになった。平成27年（2015年）に設立100周年を迎えた「鎌倉同人会」は、陸奥宗光の子で外交官として活躍した陸奥広吉、洋画壇の大御所黒田清輝など、鎌倉在住の錚々たる人々が発起人となり設立された。彼らは鎌倉をさらに住みよいまちにすることや、観光地としても内外にもっとアピールすべきと考え、同じ志をもつ人々に呼びかけ、会を構成していった。鎌倉同人会では、創立当初から昭和にかけて鎌倉駅舎改築の要請、鎌倉国宝館の建設のほか、関東大震災の時には救護薬品の寄贈や復興の援助を行うなど、まちづくりに係る事業を積極的に進め、現在も歴史文化講座の開講や石碑の建立・保全など、鎌倉の文化の発展・向上を目指し、活動を続けている。

また、鎌倉は明治から昭和にかけて、「鎌倉文士」と呼ばれた多くの作家や詩人、歌人、俳人などが移り住み、文学との関わりが深いまちである。明治・大正期の文学史上、重要な位置を占めた文学同人誌「白樺」は、そこに集る同人の多くが富裕階級の出身であり、長與専斎の子である長與善郎よしろうの家などを拠点に活動していた。その後、関東大震災で東京が大きな被害に遭ったことをきっかけに、文学者の一部が温暖な気候に恵まれ、歴史と緑に包まれた環境に惹かれ、東京から鎌倉へと移住した。大正13年（1924年）、14年（1925年）に相次いで鎌倉に移り住んだ里見弴さとみとんと久米正雄は、昭和11年（1936年）に「鎌倉ペンクラブ」を発足させ、永井龍男、大佛次郎、川端康成、横山隆一、小林秀雄、島木健作ら42人の作家、文化人が名を連ねた。また、久米正雄と大佛次郎は、昭和9年（1934年）から約30年にわたって続いた、夏の風物詩「鎌倉カーニバル」を発案するなど、地域に大きく貢献した。こうして昭和の文壇史に大きな足跡を残す「鎌倉文士」たちを生み出した鎌倉は、今も多くの文学者を受け入れ、新しい文学をこの地から世に送り出している。

市教育委員会発行の「鎌倉文学碑めぐり」によると、鎌倉には七十数基に及ぶ文学碑があり、その中には由比ガ浜に住んだ俳人高浜虚子たかはまきよし きよしあんあとの「虚子庵趾」、長谷寺境内に建つ久米正雄の胸像など、鎌倉文士ゆかりのものが多く、これら市内各所に点在する文学碑からも鎌倉が文学のまちといわれる由来が感じられる。加えて鎌倉文士の作品の中には、鎌倉のまちを取り上げたものも多く存在し、作品に登場する市街地を歩くことで、当時のまちの息づかいを今も感じることができる。日本人で初めてノーベル文学賞を受賞した川端康成は長く鎌倉に住んだことから、「山の音」で長谷の自宅付近をモデルとするなど、作品にも多く鎌倉を登場させている。

また、前述した鎌倉文学館では、鎌倉ゆかりの作家にスポットを当てた特別展を開催するなど、鎌倉に根付いている文学活動を支える施設となっている。この他、現存している鎌倉文士ゆかりの建築物としては、「野尻邸（旧大佛次郎茶亭）」、「吉屋信子記念館」が挙げ

られる。

野尻邸は若宮大路とその東側に並行に走る辻説法通りに挟まれた、ゆるやかにカーブする細い路地沿いに位置し、落ち着いた色調の板塀は、郷愁をいざなう路地景観を形成している。板塀の奥には、大正9年(1920年)に建築され、鎌倉文士の交流の場でもあった茅葺きの茶亭が残る。建物は市景観重要建築物等に指定されるとともに、鎌倉風致保存会の指定保存建造物になっている。

吉屋信子記念館は、鎌倉文学館から200m程南東に進んだ閑静な住宅街に位置する。建物は、近代数寄屋建築の第一人者である吉田五十八が昭和37年(1962年)、吉屋に「奈良の尼寺のように」と望まれて設計を行ったと伝わる。建物内部の書斎は信子の生前のままの形で保存され、春と秋に一般公開を行い、直筆原稿や愛用品を展示している。市民の学習施設として、昭和49年(1974年)の開館以来、多くの人々に親しまれ、利用されている。

また、文学者が移り住んだ時期と同じくして、多くの文化人も鎌倉に居を構えており、旧川喜多邸別邸、鎌木清方記念美術館はその歴史を今に伝えている。

旧川喜多邸別邸は、寿福寺の東側から横須賀線の踏切を渡り、小町通りへ至るまで続く窟小路に面し、その黒い板塀は、鎌倉の小路の景観をより印象深いものとしている。ここは生涯を通じて外国映画の輸入と配給、海外への日本映画紹介などに情熱を注いだ川喜多長政・かしこ夫妻の住んだ地である。敷地内にある夫妻が住んだ棧瓦葺き寄棟の木造平屋建ての和風建築は、東京にあった哲学者の和辻哲郎の住宅を昭和36年(1961年)に移築したもので、もとは昭和13年(1938年)に江戸末期創建と見られる神奈川県大山の麓にあ

った古民家を東京に解体移築したと伝わる。旧市街地の谷戸の高台に建つこの建物は、背後の山並みと棧瓦葺きの屋根が調和し、地域を代表する魅力的な景観を形成している。平成6年(1994年)に市に寄贈された後、住宅の東側には川喜多映画記念館が整備され、映



写真2-108 野尻邸(旧大佛次郎茶亭)



写真2-109 吉屋信子記念館



写真2-110 黒い板塀(窟小路)



写真2-111 旧川喜多邸別邸

画文化の歴史を伝えている。

鏑木清方記念美術館は、川喜多映画記念館から南に100m程進んだ場所にある。鏑木清方は女性の美や庶民生活などを題材とした近代日本画の巨匠で、文化勲章を受賞している。この地は鏑木清方の自宅があった場所で、平成6年(1994年)に市に寄附され、美術館として作品を公開している。なお、清方も前述の吉屋信子記念館の設計者、吉田五十八と懇意にしており、画室は東京にあった昭和29年(1954年)建築の部材をそのまま使用し再現したものである。



写真2-112 鏑木清方記念美術館

オ 今も残る別荘地の趣

鎌倉が別荘地として発展した背景には、多くの歴史的遺産を有し、古都の風情を湛え、温暖な気候に恵まれた海浜保養の適地であったことに加えて、多くの別荘が建てられ、人々の高質な営みをもたらした別荘文化の繁栄が大きな理由としてあげられる。

大正時代に起きた関東大震災をきっかけに、鎌倉は別荘地ではなく常住の地へと変わっていったが、この地で育まれた別荘文化は、ここに住まう人や訪れる人の間で引き継がれており、往時を偲ばせる歴史的な建造物を核とした別荘地としての風情や趣が今もまちの至るところに息づいている。

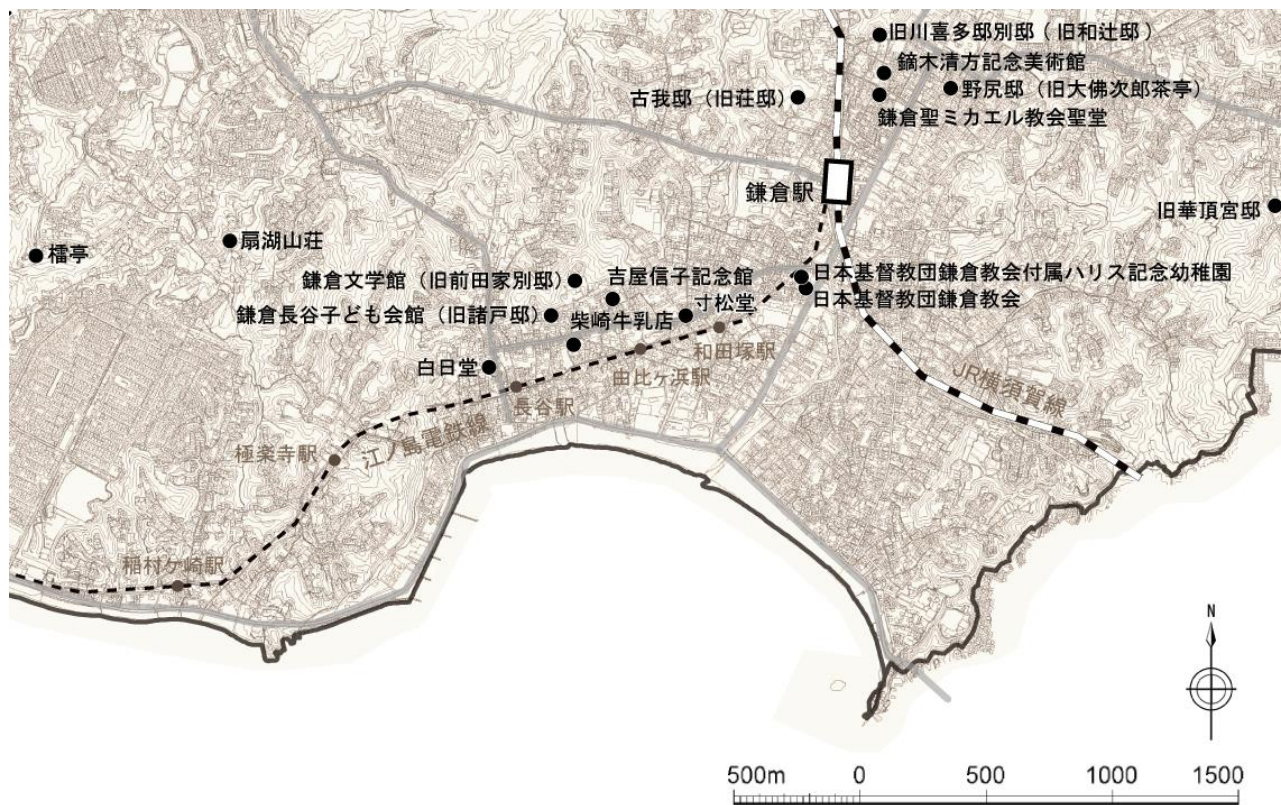


図2-25 別荘文化に関連する建造物

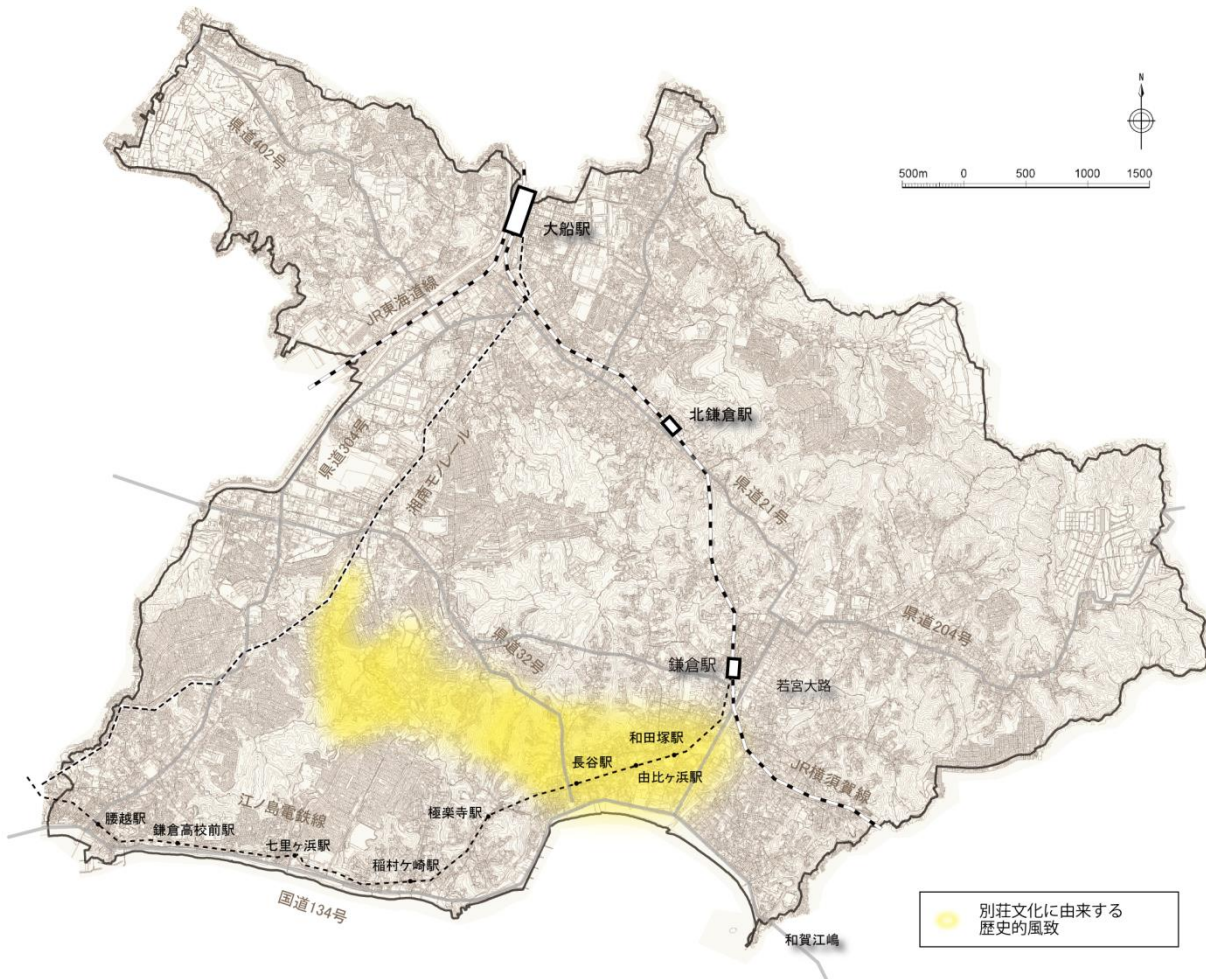


図2-26 別荘文化に由来する歴史的風致の範囲